



## 平成20年度滋賀県指定文化財

# 「木造薬師如来坐像」

長浜市教育委員会文化財保護センター  
主幹 秀平 文忠

### はじめに

舎那院は、長浜市宮前町にある真言宗豊山派寺院です。春の曳山祭で知られる長濱八幡宮に隣接し、8月には境内に芙蓉の花が咲き誇ります。

かつては長濱八幡宮には勝軍山新放生寺という神宮寺が付属し、舎那院はその寺房の一つで、学事を統括する学頭職でした。新放生寺は室町時代にはその名が見え、永享11年(1439)には三重塔と御堂が建立され、天文5年(1536)には後奈良天皇祈願の編旨を受けています。舎那院の名も、中興の祖とされる僧及雅による大永7年(1527)の寄進状に初出します。

戦国時代に衰退した舎那院は、長浜城主となった羽柴秀吉により手厚い保護を受けました。天正2年(1574)に城下町整備の一環で長濱八幡宮とともに現在地に移転・復興され、天正19年には秀吉から20石の朱印状を与えられています。『淡海木間撰』によれば、江戸時代には舎那院は明王院(浅井郡)、寂静院(浅井郡)、悉地院(坂田郡)、菅山寺密蔵院(伊香郡)とともに「五箇の院家」と呼ばれ豊山派中本山長浜総持寺末でも別格とされました。



舎那院境内

しかし、江戸時代には社坊22坊を誇った新放生寺も、明治の神仏分離令によ

り長濱八幡宮から切り離され、舎那院以外の社坊はすべて廃絶。多数の寺宝は舎那院1か所に集約されました。現在は境内に大型の収蔵庫2棟を備え、重要文化財に指定されている仏像や仏画、工芸品などを多数収める仏教美術の宝庫として知られます。そのなかで、平成20年度に新たに滋賀県指定文化財に指定されたのが、木造薬師如来坐像です。

### 薬師如来坐像の概要

『近江国坂田郡志』によれば、現在長濱八幡宮の境内にある天満宮本殿は、明治維新までは薬師堂と呼ばれ、その本尊がこの薬師如来坐像でした。

本像は像高83.2cm、髪際高71.7cmの等身大の坐像です。螺髪を刻んだ肉髻を表し、衲衣を偏袒右肩に着け、右手のひらを正面に向け、左手に薬壺を載せ、右脚を外にして結跏趺坐する薬師如来を表します。薬師如来は東方浄土の教主で、人びとの病苦や災禍を取り除くことによって、悟りへと導く尊格です。

構造的には、ヒノキと思われる針葉樹材を用いて、頭



薬師如来坐像(正面)

部から身体の根幹を一材から彫り出した、いわゆる一木造です。これに干割れ防止と軽量化のため、背中から像内をくり抜く内刳を施し、蓋板を当てます。そして右肘から先と右腰脇の部材、左肩から腰脇にかけての部材を矧ぎ付け、左手首を差し込みます。両膝はまた別に材を寄せています。

現状では表面に漆箔を施し、螺髪に群青、肉髻珠や唇に朱などの彩色が施されていますが、これらは後世の修理で、目・眉・鼻にも修正が加えられています。肉髻珠、白毫、鼻先、両耳朶、右肘以下、左手首以下、持物、別保管されている裳先も後補です。

### 平安時代中期の仏像

奈良時代の仏像は均整の取れた理想的なプロポーションをしていましたが、平安時代の仏像は身体の一部を強調することによって、あえて均整を崩すことから始まります。大粒の螺髪や、奥行の深い体軀、強調された太股、異様に長い右手、深く彫り込まれた衣文線といった造形が、礼拝する者に威圧感や不安定感を与え、仏の厳かさや動きを印象付けます。

しかし、そのような極端な仏像は徐々に好まれなくなったためか、平安時代後期にかけて体軀は奥行を減じて薄くなり、深く鑄立った衣文は浅く柔かくなり、穏やかな姿へと移行していきます。このような穏健化を和様化ともいいます。

和様化は、平等院鳳凰堂阿弥陀如来坐像(1053年)で知られる仏師定朝の登場によって決定付けられますが、それまでの過渡期である10世紀から11世紀前半にかけてが、彫刻にとっての平安中期にあたります。

### 舎那院像に見る和様化

本像も量感を残しながら、抑揚を抑えていく平安中期彫刻の特色が表れています。奥行の深い頭部には粒の大きな螺髪を配し、肉髻部と地髪部の段差を曖昧にしています。後頭

部の螺髪が地髪頂上を中心として同心円状に配列されるのも特徴的です。面貌については、後世の修正はあるものの、下に湾曲した2本の輪郭線で



薬師如来坐像（面相部）

括る伏し目がちな眼差しや、厚めの耳輪といったこの時代の特徴が見受けられます。

体軀については、三道や胸・腹の括れを明快に彫り込んでいます。側面観は胸・腹と厚みを増していき、膝部分には十分な幅と奥行を持たせています。それは正三角形に近い像底の形状からもうかがわれます。しかし県内の基準作例である善水寺薬師如来坐像(993年)などと比べると、各部の丸みや量感はさらに減じられています。面長な面貌も相まって、むしろ兵庫・弥勒寺弥勒仏坐像(999年)に近い上半身の伸びやかさを感じます。平行線で表した左上膊部の衣文線にはやや堅さが見られるものの、右肩に懸かる衲衣先端部、腹部には翻波式衣文が見られます。翻波式衣文とは、角を丸めた大きな波と鑄立った小さな波を交互に繰り返す衣文線のことです。奈良時代末期から



薬師如来坐像（左側面）

平安時代中期にかけて特徴的に見られるものです。大きく張った膝前部や衤衣左袖、右太股にも同心円状に整理された翻波式衣文が配され、左肘後方にはやや写し崩れた感のある渦文が見られます。渦文もまた平安時代前期から中期にかけて見られる技法です。正面膝前中央の裳裾部分には、ワンポイントとして装飾的な襷の折り返しが見られます。

このような、段差を明瞭にしない肉髻部、シンプルな湾曲線で作る伏し目がちな目、奥行き感と量感を残した体軀、整理された翻波式衣文・渦文といった表現は、過渡的な当代の特徴をよく伝えています。

### 像底銘文からみる来歴

本像は、そのユニークな来歴が注目されています。近年の研究により、像底に記された銘文から、本像がもと書写山円教寺（兵庫県姫路市）根本堂の本尊であったこと、そして羽柴秀吉によって移座されてきたことが明らかになってきています。

この薬師像の像底には、布貼彩色の上に朱漆で記された銘文があり、鎌倉時代と江戸時代の修理について記載されています。

修補大勸進東岳院覚如阿闍梨金剛佛師慈真行年六十二／門弟覚勝審真大佛師法眼実圓／元享(ママ)三癸亥年五月五日／

奉修復醫王尊軀江坂田郡新放生寺講中敬白／峯正徳四甲午禊仲夏穀日

前半部分には、元享3年(1323)5月5日に、修補大勸進である東岳院覚如阿闍梨慈真が62歳のときに、門弟の覚勝審真と大仏師法眼実圓とともに本像を修理し終えたことが記されています。後半部分と同じ筆致であることから、何らかの資料を参考にして正徳4年(1714)に転写したものと考えられます。

一方の後半部分には、正徳4年の仲夏(陰暦5月)に、江州坂田郡新放生寺の講中が医王尊軀(薬師如来の身体)を修復したことが記されています。新放生寺周辺ではこの時期

集中的に修理事業が行われたとみえて、現在舎那院護摩堂に伝わる木造不動明王立像(平安時代後期)も同じ正徳4年に、また同じ神宮寺である妙覚院伝来の



薬師如来坐像(像底部)

長浜市所有木造聖観音立像(平安時代中期・長浜市指定文化財)も正徳元年に修理を受けています。

### 書写山円教寺の本尊

さて、前半部分に出てくる勸進僧慈真については、円教寺の中世の記録『拵拾集』にその名が見られることが知られています。

それによれば、延慶元年(1308)に焼失した円教寺根本堂の本尊薬師如来像について、元享3年(1323)4月27日に東岳院覚如坊慈真を大願主として修理を開始したとあります。舎那院像の銘文と時期や人名が一致することから、本像がもと円教寺根本堂の本尊であったことがわかります。

慈真は、元弘3年(1333)には後醍醐天皇が円教寺に立ち寄った際に律師に任じられ、延文2年(1357)には焼失した五重塔の再興大勸進の一人に名を連ねています。本像も復興事業の一環として修理されたものと考えられますが、5月5日には完成していることから10日間ほどの小規模修理で済んだようです。

### 性空ゆかりの像

円教寺根本堂については、寛弘7年(1010)の『延照記』本堂の条に、かつて二間だった草堂を性空が作り替えて檜皮葺の三間四面としたと記されます。この本堂に安置される仏

像の中に「身金色薬師像一軀」の記載が見られ、正安2年(1300)の『遺統集』ではこれを根本堂本尊としていることから、本尊すなわち現舎那院像は性空が本堂を建て替えた頃までさかのぼる可能性があります。

性空(?~1007年)は平安時代中期の天台僧で、書写上人と呼ばれました。京の従四位下橘善根を父とし、10歳で『法華経』を読み始め、36歳のとき出家。日向霧島山や筑前背振山での修行ののち、康保3年(996)、57歳のときに書写山に入り、円教寺を開いたと伝えます。霊験をもって知られ、花山法皇の2度にわたる行幸をはじめ、皇族・貴族・歌人など多様な支持者を集めました。

性空は寛弘4年(1007)に没しましたが、長徳3年(997)には円教寺一山の経営を弟子延照に任せていることから、本像の成立も入山後からその時期までに絞られてくると考えられます。書写山とその周辺には、円教寺講堂釈迦三尊像(987年)や常行堂阿弥陀如来坐像(1005年)、円教寺の奥院といわれた先述の弥勒寺弥勒仏坐像(999年)など、平安時代中期の基準作例がいくつも遺されています。本像制作が10世紀末の性空在世時にさかのぼるならば、書写山周辺の彫刻史を考えるうえでも大きく寄与するでしょう。

## 長浜への移座

そのような本尊が、なぜ長浜にやってきたのでしょうか。このことについては、羽柴秀吉によってもたらされたとの伝承があります。

『信長公記』によれば、長浜城主だった秀吉は織田信長の命により天正6年(1578)に播磨に出兵し、書写山に布陣します。円教寺堂舎の古材には、その際に刻まれた羽柴秀長(秀吉の弟)の部下による落書が見られます。円教寺側の記録『古今略記』には、根本堂の薬師像がこの争乱の際に失われ、別の像と入れ替わったことが記されています。おそらく羽柴軍によって移座され、当時秀吉によって

保護されていた長濱八幡宮・新放生寺に施入されたものと考えられています。その後、八幡宮境内の薬師堂に安置され、明治の神仏分離令を経て舎那院に移されました。

同様の来歴は、同じ長浜市内の知善院や徳勝寺にも見受けられます。知善院本尊の阿弥陀三尊像(鎌倉時代後期)は、『近江輿地志略』によれば性空上人の作で、播磨国書写山にあったものを秀吉が西国発向のときに迎え取って当寺に寄付したとされます。また徳勝寺薬師如来像は、『近江国坂田郡志』によればもと八幡宮内薬師堂本尊と一対のもので、秀吉が播州書写山より将来してきたものを寄付したと伝えます。

## おわりに

以上のように、本像は平安時代前期の厚重的彫刻から後期の和様彫刻への過渡期にあたる10世紀末期から11世紀初頭にかけての作例として彫刻史上貴重なものといえます。あわせて、もとは円教寺根本堂本尊であり性空在世当時の作である可能性があること、そして戦国の世を経て地元長浜にとってゆかりの深い秀吉が移座に関わったということも意義深いといえるでしょう。

数奇な運命をたどってここ舎那院に至った薬師如来坐像。県指定を受けて、これからはますます大切に守り伝えられ、メッセージを発し続けていくことを願ってやみません。(写真掲載承諾舎那院、写真提供滋賀県教育委員会)

### 滋賀文化財教室シリーズ No.230号

発行年月日 2009年3月10日  
編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会  
〒520-2122 大津市瀬田南大萱町1732-2  
TEL(077)548-9780 FAX(077)543-1525